

旧制第四高等学校のスポーツ活動研究（２）:昭和２～３年（井上靖在籍当時）の柔道部練習日誌から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大久保, 英哲, Okubo, Hideaki メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4399

旧制第四高等学校のスポーツ活動研究 (2)

—昭和2～3年(井上靖在籍当時)の柔道部練習日誌から—

大久保 英哲

Historical Study of the Sports Activity in the former 4th High School, Kanazawa: Judo Club Life from the Club Log, 1927-28 (No.2)

Hideaki OKUBO

本研究は旧制高等学校の活動形態やスポーツマインドが具体的にはどのような過程で形成されていったのかを、大正3(1914)年から昭和21(1946)年までの分が残されている旧制第四高等学校柔道部の対外試合記録『南下戦記』及び練習日誌『南下軍』(石川県立歴史博物館, 第四高等学校記念館所蔵, 若干名称は異なる場合がある)の記述をもとに、「部員たちの意識や行動を丹念にフォローする」なかで明らかにしようとするものである。

これまで筆者は四高柔道部が全国高専大会で七連覇を遂げ始める大正3(1914)年の日誌を検討し、初期には比較的練習時間も短く、合理的かつ常識的活動内容であったことを指摘してきた。(拙稿「旧制第四高等学校のスポーツ活動研究(1)」参照)

本稿では八連覇を逸した大正10年以後、敗退を続ける年のなかでは最も戦力が充実し、優勝奪回の期待が込められたがやはり敗退した昭和2(1927)年～昭和3(1928)年にかけての日誌を取り上げる。戸松¹⁾(298頁)によれば、以後の四高柔道は「没落」したと目され、また事実優勝に名を連ねることもなかった。その意味で「掉尾の決死戦」に向かい、かつ敗者となる部員達の練習に対する意識や行動を知る格好の資料である。具体的には昭和2(1927)年4月1日～昭和3(1928)年7月28日(約16ヶ月)分について、共通目標、練習内容、運営形

態、入退部行動、部員の出席状況から見た活動意欲、練習以外の部行動、学業など学校生活との関係から検討を加え、その実態と特色を明らかにする²⁾。

なおこの時期(昭和2(1927)年4月～昭和4(1929)年6月)には、著名な作家井上靖(1907-1991)が四高柔道部員であり、その経験を『北の海』などさまざまな作品に残しており、合わせて考察を加えてみたい。(ただし、井上靖が、主将を務め、また柔道部から離脱する昭和4年分についてはなぜか日誌が欠落している。)

1. 四高柔道部の概略

まず最初に、戸松¹⁾にもとづき、本稿に係る時期四高柔道部の概略について述べておきたい。

(大正2(1913)年以前については拙稿「旧制第四高等学校のスポーツ活動研究(1)」参照)

・大正2(1913)年 9月嘉納治五郎来校(講道館より指導を受け柔道研究)

・大正3(1914)年 12月 第1回全国高専柔道大会(京都帝大主催)四・六・七高参加, 四高優勝。六高との切磋琢磨が始まる。15人ずつの対戦。

・大正4(1915)年12月 第2回全国高専柔道大会(京都武徳殿)参加校6校, 四高二連覇。四高は崩れ上四方と立ち技から寝技への連絡変化技に妙有り(戸松¹⁾277頁)

・大正5(1916)年 大将戦は時間無制限とな

る、六高大将川地と四高大将駒井の対戦は1時間半に及び、引き分け。川地はそれまでに四高の三将副将と戦っているため、1人で連続して2時間以上の試合を行った。

以後

・大正9（1920）年8月（この年から8月開催）の第7回全国高専柔道大会まで四高七連覇

・大正10（1921）年7月 第8回全国高専柔道大会9校参加 準決勝戦で四高対六高深夜2時まで戦った末引き分け、五高優勝、これ以後大將戦も1時間に時間制限。

・大正11（1922）年7月 第9回全国高専柔道大会8校参加 四高初戦で五高に敗退、六高優勝、以後六高8連勝

・昭和2（1927）年（第14回大会）六高に破れる。

・昭和3（1928）年（第15回大会） 四高40名の充実した陣容で六高から優勝奪回を図る。だが、準決勝で松山高に破れ、敗退。「以後四高における左翼運動は年とともに盛んになり、ストライキさえ起こすに至った。それらの影響で柔道部に在部するものはほとんど無くなってしまった。・・・四高柔道の神髄は、事実上この年をもって終わりを告げるにいたった。」（戸松¹⁾ 299頁）

2. 井上靖について

井上靖（1907-1991）。昭和2（1927）年、20歳の時に第四高等学校理科甲類に入り、昭和2（1927）年4月～昭和4（1929）年6月まで柔道部に在籍、昭和5（1930）年卒業後、九州帝大から京都帝大に入学。やがて新聞記者から作家に転じ、『氷壁』や数々の「シルクロード紀行」を発表した文化勲章受賞作家、日本ペンクラブ会長を務めた作家であるとともに、四高時代は柔道部に明け暮れて主将まで務めた人である。『北の海』に描かれているように、井上靖は体格や天分が物をいう立ち技よりも「練習量がすべてを決定する柔道」として寝技を重視し、かつ夢見て、徹底して練習に明け暮れるストイッ

クな生活を自己に課した。

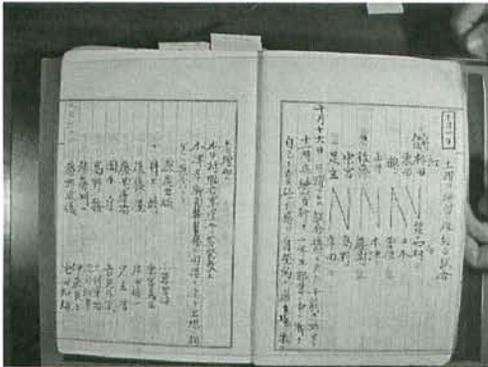
「私は高校時代を金沢の沈鬱な気候の中で、徹底的な禁欲生活を送った。柔道部に籍を置いていたので、他の学生が持つような青春を享受するといったゆとりはなかった」と回顧する。「明けても暮れても、私たちは道場で組み合っていた。冬休みも春休みもなかった。夏期休暇だけ何日間か家に帰ることができただけで、あとは柔道ばかりだった。その頃私たちはお互いに関心を持ったものである。学問をやりに来たと思うな、われわれは柔道をやりに来たのである、と。」
「学校の運動部のあり方やスポーツのあり方について考える時、この私の経験した四高柔道部の部員たちの生活にはいろいろな批判ができるが、しかし私はこれを全面的に否定する気持ちにはなれない。私たちが柔道をやったのは、柔道が強くなりたいためでも、有名な選手になりたいためでもなかった。全く各自が自己に課した一つの青春の日の過ごし方であって、厳しく自分で自分を律した一時期であったのである。その後体験した軍隊生活よりもっと辛かったが、しかし軍隊生活と違うところは、一方が全く権力によって強いられているのに対し、他は自分が自分を律していることであった。その点私たちは道場という一つの修道院にはいったようなものであった」³⁾。

3. 本稿で使用した日誌について

日誌の概要については、拙稿「旧制第四高等学校のスポーツ活動研究（1）」参照のこと。ここで使用したのはそのうち、No.12 昭和2（1927）年3月-7月 210丁 頁番号なし、一部乱丁あり、No.13 昭和2（1927）年8月-昭和3年3月 110丁、頁番号なし、である。

記述内容は、日付、練習時間、練習内容、来訪者、紅白戦結果、部員の状況、話し合いの内容、決意などが筆書きされている。判読困難な箇所や、当て字、誤字などもしばしば散見される。なお大正3年の日誌に大きな比重を占めていた部員出勤簿はない。筆者名は記されていない

いが、紅白試合の対戦相手や決まり技、決着時間、練習や試合に関する所感、「本日練習なし」など、部の活動が全般的に比較的細かに記されていることから、複数の取締役のうちの、練習には直接参加しない立場のマネージャーが記録しているのではないかとと思われる。（なお、原文は送りカナであるが、ここではかなにしている）



4. 練習日誌の分析

以下分量も多いために、いくつかの項目ごとにその記述を整理してみる。

四高柔道部の共通目的

(1) 「全国高専柔道大会」

四高柔道部員に共通する目的は全国高専柔道大会で再び覇権を奪取すること、そのために連覇を続けている六高を破ることであった。大会が近づくにつれ、それは繰り返し確認され、また話し合いも持たれている。

昭和2年10月28日

「午後五時練習を終える。道場に車座になって話合った。先ず富田、杉田を初めとし三年生全部腹藏なく意見を發表し今迄の方針に誤りがあったことを述べて謝す。石村、鶴等は之に回答してその謝すの必要なく要するに我等が覇業へ向ふ当然ふむべき道程なりといった。九時頃夕食を執り再び会したり 十一時に至るも話題がつきず 十一時頃解散した要するに部員の自覚を以て柔道を為すに非ざれば南下はいふも更にて柔道を為す意義なんといふことに結末した」

昭和3年4月26日

「南下もあと三ヶ月足らずとなった各人の南下に対し決心固いものあるは勿論なれども尚この際部員の南下意識づける為に宣誓を行った心の底にあるものを吐露して偽のない決心の程を示した精神的にある基礎の上に築き上げられた結果こそ南下軍優勝の鍵であろう」

昭和3年7月5日

「南下出陣愈々一週間の近きに迫る此の際にあたりて各人の最善の自重、自愛は最も重大なることにして吾々の身体は吾々のものではない南下の為に凡てを奉けたるものなれば南下のための最善のコンディションを築くために如何なる苦痛も凌ぎ自愛を要する時なり。」

昭和2年10月28日分は、それまでの柔道部の活動方針について部活動の幹部3年生が前日の大会の反省も込め、約5時間にわたって行った話し合いの様子が書かれたものである。昭和3年4月26日分は南下3ヶ月前に行った南下宣誓式の様子である。昭和3年7月5日には自分たちの体は南下のためにあるとさえ書かれてある。井上も同様に「全く、インターハイで優勝することだけが目的の柔道だったのである。」

（井上³⁾、512頁）と述べている。また大会が近づくにつれ、日誌の記述量自体が増加していることも指摘しておきたい。1年間の日誌の半

分以上が4月から7月の試合期に書かれている。試合が近づくとつれて「気を養う」「精神的にある基礎」「ファイティングスピリット」など精神的な高揚を示す記述が増加し、また「全員挙って敵に猛襲を浴びせるのみ総攻撃！！」（S3.7.14）など部活動全体の士気を高め、部員を鼓舞する記述が数多くみられる。

さらに高専大会優勝は、現役部員だけの悲願ではなく、卒業生、学校、あるいは市民も巻き込んだの関心事であった。「本日杉田氏仙台より来らる」（S3.5.16）、「本日先輩岡本 大倉両氏京大より来る」（S3.5.21）、「東京帝大より内藤先輩応援に来る」（S3.5.28）、「浅水 小林先輩を初め東大京大東北大の各先輩多数応援に来られて盛況なり」（S3.5.29）、「東北帝大より河合先輩合宿へ来らる。」（S3.6.28）、「池内先輩京都より応援に来られ又尾崎久八先輩京都に行かれる途中吾々の練習振りに見に来らる。」（S3.7.3）、「校長 長岡先生 上原理事等見えた 此の日校長先生も道場に見へ試合大いに緊張味を来す。」（S3.4.25）「金沢澤頭に出ずれば多数の応援団及び諸先生、各部委員、市民の熱誠なる見送りを受く」（S3.7.14）など、全国各地の大学から沢山のOB、また校長を先頭に学校関係者も激励に無声堂に訪れている。またそのOBの多くが練習に参加して部活動に緊張感と活気を与えている。高専大会で優勝することが現役部員だけの悲願ではなく、卒業した柔道部OBや学校、さらには金沢という地域を巻き込んだ悲願であったことがうかがえる。

(2) その他の大会

柔道部の試合はもちろん高専大会だけではなくその他にも多くの対外試合を行っていた。部内の紅白試合を除いた試合は以下のとおりである。

- 5.1 新入寮生歓迎試合
- 5.8 武徳会昇段試合
- 5.18 明大予科と試合（審判問題で不成立）
- 6.11 中等連合との試合（記述の内容より、四

高勝利と判断）

- 8.29 石川師範学校、金沢一中との紅白試合（四高勝利）
 - 8.30 石川師範学校を招待し紅白試合（四高勝利）
 - 9.12 金沢一中、石川師範学校と練習試合（四高勝利）
 - 10.22 全校医大十全会主催北信高等専門学校柔道大会（四高優勝）
 - 10.22 中等学校連合と一年の試合
 - 11.1 対級柔道優勝試合（校内柔道大会、結果は不明）
 - 11.19 一中校内柔道大会（井上ら勝利）
 - 11.20 石川師範学校と一年生が試合（一年生敗北）
- 昭和3年
- 1.22 石川師範学校にて柔道大会（須藤ら敗北）
 - 1.31 金沢二中にて柔道大会（正井、深尾、井上勝利）
 - 2.4 松任農学校と試合（正井ら成績不良）
 - 2.5 小松中学及県体育協会主催一市四郡武道大会（盛会ならず、宮崎優勝）
 - 2.11 第三十二回柔道大会 出送別対科試合（文科対理科、文科勝利）
 - 4.25 新入部員歓迎試合（新入生対二年生、二年生勝利）石川師範学校と一年生の試合（引き分け）
 - 5.27 砺波中にて試合（四高勝利）
 - 6.10 神通中学、砺波中学と試合（足立ら勝利）
 - 6.25 砺波中学と一年生が試合（一年生勝利）

これらの様々な試合のほとんどが南下の準備のために行われ、ほぼ全てに四高は勝利しているが、昭和3年1月の石川県師範学校との対戦では敗退し、「何の面目ありて南下を云うことが出来ようか こんな状態では六高はおろか三年前の二の舞を演ずるばかりだ 気持がだれて力が無いことを知らずに居た部員に取て一服の清涼剤かも知れず否これを刺激として我々は考うるところが無くてはならない。兔に角今日は醜

態を如何なく暴露したこれ以上何ということ
はできない」（S3.1.22）との厳しい反省がなさ
れている。

目標が高専大会優勝である四高柔道部にとっ
て対外試合の経験は不可欠であり、また練習の
活性化のためにも必要であったと思われる。ま
た、柔道部が高専大会の次に重要視していた大
会は、「北信柔道大会近づく部員の覚悟又壮にて
大花を散らす」（S2.10.10）、「日曜なるも試合近
づきたれば午前九時より十一時迄練習を行ふ本
日対連合軍選手名発表す」（S2.10.16）、「堅町天
狗にて祝勝兼定期コンパを行ふ」（S2.10.22）な
どの記述から北信高等専門学校柔道大会であっ
たということがわかる。

（3）柔道部員の活動意欲、練習への参加

練習参加は基本的には個人の判断に委ねられ
ている。そのため、特に1月から3月には、「放
課後直ぐに練習始む未だ人数そろわず平凡に練
習開始す」（S3.1.9）、「技に於ては相当の域に達
しているが元気が足らずとの評であった事実今
年になってはどうしたものか部員の元気がない
」（S3.1.12）、「本日より寒稽古開始す参加す
る者僅か五名淋し近頃練習いよいよだれ気味な
り（中略）見学者非常多し各れも理由ありされ
ど脆弱なり」（S3.1.16）、「見学者多し悲観状態
なり」（S3.1.18）、「欠席者が目茶に多い情けな
いことだ特に部の幹部級が一人も出席しないの
は何たる醜態ぞ（中略）五人掛をやろうと思っ
たが人数が少なくてやれない加うるに少数の出
席者の中にも不遜な語を吐く者が居るに於ては
問題にならん」（S3.2.1）、「午前九時より三分
間練習の後解散式を行う 合宿当初にあつては
可なりの人数があつたけれ共今見ればその半
数にも達せぬ色々事情があつたのだらうけれ
ども合宿の後半に至ってにはかに中途にして帰
るもの多く特に不都合なのは何等の申し出な
く勝手に帰った人の二三あつたことである」（
S3.3.30）など、の記述も多く見られる。

つまり、見学者、欠席者が多く人数が充分に

揃わず活動が停滞している旨の記述も多い。原
因として考えられるのは、試合期ではないため
部員の意欲が低いこと、冬季で練習環境が悪く
怪我が多く発生したことなどがあげられる。そ
のため次のような対策が講じられている。「近頃
旧部員の練習がだれて来たその原因はどこにあ
るか夜三年生集って対策を講じた」（S3.4.22）。
「新入部員歓迎試合を行う出席者総数の半分
平日より徹底した狩出しをせねばならぬ」（
S3.4.25）

このように、練習日誌の記述を担当したり、
取り締まりに当たっている3年生幹部は部活動
意欲も高かったが、試合期以外には下級生や大
会に出場することができない非選手の練習参加
意欲は必ずしも高くはなかったのではないかと
推察される。

（4）部活動の運営形態

a.指導者の有無

練習日誌『南下軍』には柏原俊一、浅水成吉
朗と2名の師範が出てくる。柏原俊一師範（昭
和3年4月-昭和5年3月は京都から来ている（戸
松¹⁾、296頁）が、部活動に関与しているよう
な記述は少ない。

浅水成吉朗（大正14年12月-昭和6年5月）
は青森の出身。大正2年四高を卒業、京都帝大
在学中全国高専大会の実現に尽力した。大正10
年以後に始まった四高柔道部の衰退を挽回せん
と教職の身を熊本県から金沢に移して石川師範
の教師となり、柔道部再建に挺身した⁸⁾（294
頁）、戸松¹⁾（154頁）。しかし、「浅水先輩より
の注意ありければ最初の中は日曜日を休むこと
とせり」（S2.9.3）、「浅水先輩を初め諸先輩と
会合今後三週間の練習に就て計画を立てたり」
（S3.6.21）とあるように、幹部が計画している
練習や試合に助言や課題を与える程度の関与で
あったように読み取れる。「練習後富田氏一年生
を集めて訓示する所ありたり」（S2.8.30）、「富
田杉田両氏特に合宿せられ指導の任に当る感謝
の辞なん」（S2.11.25）、「近頃旧部員の練習が

だれて来たその原因はどこにあるか 夜三年生集って対策と講じた」(S3.4.22), 「本日練習後二三年生道場控場に集まる今度新たに石村晴雄君に練習一切についての仕切りをやって貰うことに決定した」(S3.4.26), というように技術指導は主に富田を中心とした上級生が行っていたようだ。特に問題があった日の付近では幹部がその都度集まり, 対策について話し合っていることがわかる。

また学校内の部活動では練習はもちろんのこと, 指導もマンネリ化することは避けられない。四高柔道部が練習試合や出稽古を繰り返していることや, 「武専より矢野 佐藤両三段我合宿の為に京都より来られた だれ気味なりし練習少しでもしめることが出来たならば幸なり」(S3.3.25), 「山口県徳山中学校・山本先生を招待しコーチを受く」(S3.8.20) といったように, 外部からのコーチ来訪が歓迎されているのもそのような事情を物語っているように思う。

b. 柔道大会開催

「四高北辰会柔道部主催北陸関西中等学校柔道大会は来る二十四, 五の両日行ふこととなれり」(S2.9.12), 「午後六時より至誠堂に於いて柔道大会歓迎会を開く 当日練習を止めて大会準備を為す」(S2.9.23) とあるように, 四高の柔道部は中等学校柔道大会も主催している。柔道の競技に関して準備から当日の運営まで全責任は柔道部にあり, 柔道部員総出で大会を幹部中心に組織的に運営していたことが推測できる。このような四高が組織して行った大会には近県も含めた北陸地区の中学や師範学校などが多数参加して盛大に行われており, 下級学校に与えた影響は少なくないものと考えられる⁴⁾。

c. 部の運営

柔道部の中心となる幹部やその他委員については次のような記述から, 上級生からの指名ではなくて自分たちで決めていたことがわかる。

「最近柔道部規約を確定せんとする議起り之が事に当る委員を必要ありたり二年より互選に由り六名一年より同じく二人の委員を置くこととせり 選挙結果二年生中よりは東, 石村, 宮崎, 二木, 鶴, 北, 一年生中よりは木津, 藤岡当選せり」(S2.10)

また、『南下軍』中には主将やキャプテンという語は出てこないが, 昭和2年は富田, 3年は石村が練習を統括する役割を果たしていたことが「師範居らず富田杉田両氏特に合宿せられ指導の任に当る感謝の辞のみ」(S2.12.25), 「本日練習後二三年生道場控場に集まる今度新たに石村晴雄君に練習一切についての仕切りをやって貰うことに決定した」(S3.4.26) という記述等からわかる。二人とも二段を有し実力もあった。特に石村は, 昭和2, 3年とも大将を任されている。

d. 部律

四高柔道部は高専大会優勝という目標を掲げ, その目標達成のため様々な規制があった。それは部律として示されている。

次に示す記述は昭和2年12月24日, 合宿を前にした部律である。

「晚八時より二年生全部一年委員寮娯楽室にて集合し方針を決定す 大体の規約を決す

- 一, 練習中は取締に絶対に服従すべし
 - 一, 見学せんとする者は取締の許可を受くべし
 - 一, 許可なくして胴衣以外のものに着換ふべからず
 - 一, 自分より弱き者に挑戦すべからず
 - 一, 挑戦されたる者は拒絶することを得ず
 - 一, 見学者は同列に並ぶべからず
 - 一, 練習の相手は仇討と見よ押込しめ業にて容易に参るべからず
 - 一, 午後十一時に消灯す午後十時以後は絶対に静粛にすべし
 - 一, 午前八時頃に起床すべし
 - 一, 寮規約を守るべし
- 右の各項に違ふ時は取締は細大洩らさず注意す

ることとせり」

日誌を見る限り、合宿ごとにこのように方針を立てあるいは確認し、活動を統制していたようである。練習に対する心構えが多く見学や服装について、部員の練習態度をかなり細かなところまで成文化されている。ただし翌春の合宿は以下のように不文律で注意事項のみの記述となっている。

「合宿方針に関しては大体今の合宿にて決定せるところを不文律にて適用することとなり特に注意すべき点として左の如き規約を作つた一、見学せんとする時及び練習中胴衣以外のものに着換ふる時には取締りの許可要すべし一、酒喫煙は遠慮すべし一、午後九時以後は外出禁ず十時以後は静肅にすべし十一時に消灯す 以上」(S3.3.9)

以上のように昭和2,3年の四高柔道部の運営は部員の自主運営であったために参加不参加は自由であったが、その分練習中は緊張感を保持するために「取締」と呼ばれる人間を中心として部律を細かく決める必要があったと思われる。指導者として、浅水が練習に参加していたが石川師範学校の教員であるためにそれは、充分でなかったようだ。師範がないことは部員に対してかなりの負担がかかっていたことは間違いないであろう。富田は「四高だけはいくら学校当局を説得しても聞いて貰えず講師扱い、だから優秀な師範は来ない。師範難。これも四高転落の一因とも考えられる」(富田⁵⁾、154頁)と当時を振り返っている。

(5)練習内容

a.練習内容とその変化

四高柔道部及び高専柔道の寝技技術に関しては徳田の研究がある。体格が未完成で小さく、初心者の多かった高等学校生が最も技を習得しやすく、また体格や経験差を克服するための方法、あるいは引き分けに持ち込む技として工夫

されたのが寝技であった^{6,7)}。昭和2年4月1日から昭和3年8月までの練習日誌には合計832の練習対戦結果が記されている。このうち、決まり技が付されているのは426ある。この426の決まり技で最も多いのは「崩れ上四方」(118回, 28%)であり、次いで「締め」(50回, 12%)、「送り襟締め」, 「立て四方固め」等である。立ち技は合計しても20回(5%)に過ぎず、圧倒的に寝技が多用されていることがわかる。「新部員十数名を集めて練習後寝業の概念を説明したそれがため旧部員の練習時間が非常にさかれた」(S2.4.18)とあり、新入生にもこうした寝技の重要性が説明されている。もっとも初心者にはこうした寝技中心の長時間練習は過酷であったらしく、「新入部員中五六人を除いて外は一学期の間は立業を主としてやる方針をとることとなった。なお一年生は一時間足らずで皆帰すこととする。」(S3.4.17)との配慮も見られる。練習内容としては「体操」「返し方の研究」「乱取」「紅白試合」「個人試合」「掛け勝負」「三本勝負稽古」「立ち技試合」「ゴシゴシ」「飛行機」「一本勝負」がでてくる。この中で特徴的な四高柔道部の練習は「飛行機」と「ゴシゴシ」である。前者は四高柔道部で最も過酷なものでその内容は一人が次々と相手を変え、へばるまで試合をするという荒稽古である。例えば、昭和2年5月31日には「飛行機七台飛ぶ」という記述が見られ、七人の選手が「飛行機」を行っている。一人で20人前後を相手にし2時間を超えることもあった(S2.5.31 正井の例)。例えば昭和2年11月23日には「乱取りかたはら二木飛行機を行ふ。元気なること驚く。試合時間五分。一時間五分にて墜落す。鶴締められて落ちること五秒」とあり、二木が13人に対して9勝2敗2分(決まり技はシメ5, 送襟1, 三角1, 押込2, 崩上四1,)の後、14人目の鶴に開始後4分で締められ、失神したことが記されている。

また「押込入り方攻め方守り方ゴシゴシ業の練習には所謂俎の上に引き出して方法を執る」(S3.3.12)、「乱取押込ゴシゴシ一年練習ゴシゴ

シ」(S3.5.4)とあるように、「ゴシゴシ」とは引込み返しの要領を習得するための基本的な寝技練習の一つであった^{6) 7)}。

一日の練習の流れについては、昭和2年9月1日の記述を見よう。「体操を行ひ次に十五分間二人づつ組んで返し方の研究を行ひ後乱取を為す従来は乱取を為した後業の研究を為せり」とあり、この記述から判断すれば、体操→返し方の研究→乱取→紅白試合やその他の勝負稽古が普段の練習の流れであるようだ。この練習内容は「本日試験ある一同道場に集り合宿の打ち合わせを為す」(S2.12.24)、「午後三時より練習す今度の合宿は大体に於て三段に分けてへたばらす筈なり（十四日より十六日二十日より二十二日二十七日より二十九日）明日より午前午後二回練習するが三日目に一回位午後を休み休養せしむる予定他」(S3.3.11)、「疲労気味なり向う数日間の予定でピッチを下げる」(S2.6.12)など、状況に応じて工夫されている。

b.練習日程

通常の練習開始時間は午前の場合9時、10時から、午後の場合2時、3時からの練習が大半であった。合宿練習は主に4月から7月の高専大会前の夏期休暇や冬期休暇、春期休暇に集中して行われている。合宿の日程、期間は下記の通りである。

夏季合宿 11日間 (S2.8.20～S2.8.30)

冬季合宿 6日間 (S2.12.25～S2.12.30)

春季合宿 17日間 (S3.3.14～S3.3.30)

練習日誌が合宿によって区切られていたり、合宿ごとに規約や方針が確認されていることなどから、合宿が重視されていたことがわかる。合宿練習は昼と夜、1回の練習も3時間以上の長時間にわたることもしばしばであり、合宿は辛く厳しいものであったらしい。昭和2年の冬季合宿最終日には次のような記述がある。

「午後約十分の練習をした後合宿解散式を道場に於て行ふ思はば過去一週間この畳の上で血の出るような苦しみを体験をした或者は夜眠れ

ず夢にまで練習を見る午前午後共に乱取のみ行ったから僅か一週間だったけれども疲労の程度は大きかった」(S2.12.30)

また、合宿以外にも以下のような練習が行われていた。

寒稽古(S3.1.16 から終わりは不明)

耐久猛練習(S3.6.2 から S3.6.15 までの15日間)
これは南下直前に、盟休事件によって練習が中断され、その代わりとして19日から大会まで実施したもので、「道場内殺気現る」(S3.6.2)など、士気高揚の目的があったと見られる。

なお、このような猛練習、ことに飛行機といった過酷な長時間練習が行われた理由について述べておきたい。これは高専柔道大会の試合形式にその一因がある。高専大会は学校の名譽をかけた対校戦で、15人の勝ち抜き方式であった。そのため、理論上15人勝ち抜くことができる持久力と技が求められた。しかも試合時間は大将戦は1時間もしくは無制限であったから、ふだんからそれに備えた長時間耐久練習が行われたものと考えられる。また非力なものでも引き分けに持ち込めば、確実に味方に貢献できるために、容易にギブアップしない頑張りや寝技の工夫がこうした長時間練習を生み出したものと考えられる。

(6) 入部・退部行動について

a.勧誘・入部活動

練習日誌『南下軍』に見られる勧誘活動は大きく四高に入学する前の中学生に対するものと入学式後の勧誘に分けられる。中学生に対しては、「北柴田曾根藤岡四名居残って勧誘文五千枚を全国中学校に発送す(二千枚宛)」(S2.10.31)、「高岡中学の豊本を勧誘に北出かける」(S3.1.24)などがある。富田⁵⁾は当時の勧誘のことを『四高八十年』(154頁)に「入部勧誘の強引な出張作戦」と学生時代の思い出の一つとして取り上げている。また新入生に対しては、「応援団の新学期勧誘に関して柔道部は今年の

方法に対し異議を称ふることと決定せり」(S2.10.10)、「応援団が葉書を出す時各部の紹介状を封入することなりこれ最も合理的にして部員が意識して部に入るためなり」(S2.11.26)とあるように、学校全体の勧誘活動としては、応援団が全体を統括しており、各部はその方針に従っていた様子がうかがえる。また全国的な知名度の高さから四高を目指して練習に訪れる例も見られる。「小井川君とは青森県八戸中学柔道部員にて明年四高に入学せんとする人にて練習のため来沢中人なり」(S2.8.23)

b. 中途入部者の受け入れ

中途入部者に関する記述は多くはない。

「十月四日理一甲大伴重治君は自発的に入部せらる今日までの経緯を見るに覚悟の入部程あってその気力の旺盛なること驚くべきものあり体格の壮大と待げき我等部員又期待するところ大なりとす」(S2.10.10)、「野球部員大味金久君柔道部入部の意思あり」(S3.4.24)。大伴は紅白試合や掛勝負にその後数多く名前が見られ、活発な活動を展開している。野球部から入ってきた大味は1年生。新入部員宣誓式から11日遅れて柔道部に入る意思を見せると、すぐ次の日から練習に参加している。

一度柔道部を除名になっている者が再度入部するといった、次のような特殊な例もある。

「一旦除名したる吉田高明再び入部を願ひ出す」(S3.1.9)

「吉田高明本日より再度の入部を許可す」(S3.1.17)

再入部を願い出してから、許可まで8日間かかっていることから、この間に幹部の話し合いが行われたものと見られる。

c. 退部者について

退部者については2点の記述しか見られない。いずれも除名処分に関する記述である。「池田知幸 池田知雄の未だにふらふらなり石村 北相はかりて本日除名す彼等二人は腐り物なり

道場の空気をこわすこと甚大なり」(S3.1.18)、「練習後二三年と先輩と道場にて部員淘汰の件に就き議する所あり其結果左の五名の者を除名する所となり直ちに左の形式を取て道場内に発表し四五日盟休の形勢を見て之が静りし頃に控所に発表し生徒一般に報ずることに決す吉田高明、小暮芳雄、岡本守、吉見外武、伊藤良三 右の者除名す 昭和三年六月十五日 柔道部」(S3.6.15)

池田知幸、池田知雄は2名とも紅白試合や、掛け勝負にもほとんど参加している様子が見られず、部活動には実質的に参加していなかったのではないかと思われるが、後者の5人については上田⁸⁾は「除名の時期と言ひ、公表の用意から言つてスト関係者が含まれている可能性が高い」と述べている。実際に、小暮以下4人は『南下軍』中に頻りに名前が出てくるなど、練習には積極的に参加していた。

(7) 生活領域（特に学業）との調和

ここでは柔道部員、柔道部が生活領域や学校とどのように調和をとって活動していたのかを見ていく。

a. 柔道部員と学業

学業に対する記述はきわめて少ないが、試験を不安視する記述はいくつか見られる。しかし、それは試験への不安ではなく、試験が練習に及ぼす悪影響についての不安である。例えば「明日より最も練習に害のある試験が始まる南下を旬余の目前にひかえ試験も何もない全員の健闘を南下のためだ試験のために南下を妨げにしているものか試験中も二三年生は練習続行時間は三十分及至一時間とす皆元気なり」(S2.6.24)。前述のように井上靖は「柔道部へはいつて二、三日した時、一年上級のTという選手から、君たちは四高へ学問をやりよきたと思うな、柔道をやりよきたと思えというような訓戒を与えられた。(中略)毎日、練習、練習で練習が終ると、勉強するようなエネルギーは残されていなかった

た。」⁹⁾と書いている。柔道部員にとって学問をするための時間の確保は必ずしも充分ではなかった可能性がある。もっとも大学への進学をほぼ保障された旧制高等学校の生徒達にとっては、そのような学業よりは課外活動などへの傾斜の方がはるかに重要であったのであろう。

b.柔道部と学校

学校と柔道部の関係を取り上げたとき『南下軍』中で最も多く記述されている事柄は、四高学生運動の中で最大であった昭和3(1928)年6月の盟休事件についてである。1928年四高社会科学研究会は運動部の選手制度、応援団の強制参加を批判し、応援は自発的意志によるべきだとし、北辰会代議員会で応援団廃止が決議された。これに対して組織的応援団の必要性を強調した運動部は新たに応援団結成を学校当局に求め、許可された。また北辰会も新たに「新興応援団」を決め、準備委員会を発足させた。この2つの応援団をめぐって対立が生じ、北辰会総務委員が殴打されるという暴力事件が生じた。これに憤慨した文科3年生がことの真相究明や有志応援団を認めた生徒監の追求などを求めて、6月11日校内で非合法の学生大会を行った。これに対して生徒監はただちに解散命令を発し、混乱状態に陥った。学校側は無期停学5名、謹慎10名の処分を発し、これに対し学生側は処分取り消し、北辰会の自由獲得、生徒監の辞職勧告を求めて、6月12日からストライキに突入した。学生側の要求は通らなかったが、学校側も新たな処分は行わないという、卒業生等の調停によってこのストライキは19日に収拾された。なお、この年6月から7月にかけて山口高校、水戸高校などでもストライキが組織されており、こうした動きは全国的なものであった^{9), 10), 11)}。

このストライキに対して柔道部がどのように関わっていたのか順を追っていくと以下の通りである

「最近校内に起れる不祥事件並に生徒大会結果文科一、二、三年其他理科の一部は今日より盟

休するに到り南下戦も一ヶ月に迫れる吾部に精神的に影響する所大なり此ここに吾部としては絶対中立を保つことに決す(中略)浅水先輩より御訓示あり此際吾々部員は学校内の不穩行動に決して関らず南下戦に一意専心邁進す可き事を声明す(中略)三年選手一同の三年間の超人的努力の今一步にして報せられんとする今日こそ実に実に四高柔道部再び天下に覇を称へ山陽の雄六高を服するか否かのけじ目の時である吾々は力強い先輩の擁護の下只一途南下の優勝を期すのみ」(S3.6.12)

『南下軍』の記述からは、部内の動揺を防ぐべく即日この事件に対して中立を保つ柔道部の態度を部員に示しており、また自分たちの目標を再確認し部の士気の低下を防ごうとしている様子が書かれている。続く13日には「部としての断固たる態度を決し以て最重要なる此の際の練習上に学校事件の影響の及ぶことを防んとす依って次の声明を学校に提出し認可し受けて之を至誠堂前に発表す

声明

積年の怨を果す可き南下戦を目前に控えて一意専心練習に没頭を要する時部員の今回の事件に関係するは部精神統一上動揺を来す憂あり依て此処に我が部は盟休事件に関係せざる事を声明す

此の声明書発表後全部員道場に集合し右声明書を果すために部員の下宿に四五名づつ分れて合宿する事に決す」(S3.6.13)

と、声明文により、四高全体に自分たちの立場を明らかにした。(このときに、四五名づつの合宿体制を取ったのは内の動揺を防ぎ外部からの切り崩しに備えたものだと推測されている⁹⁾。)

同月14日には「東京京都両四柔会に此際に於ける吾部の態度状況を報告す」と記述され、OB会である四柔会に対してこの事態を報告していることからこの盟休事件が柔道部に与えた影響の大きさが分かる。

盟休事件によって練習に制約を受け、試合前

に計画されていた耐久猛練習も中断せざるを得なかったが、事件中でも練習は短いながらも行い着々と南下の準備は行なっていた。しかし、練習の絶対量に不安が生じ、事件により試験が延期されたことを利用して 17 日から合宿を計画し、南下に備えた。

「盟休事件のため一学期試験は九月十日以後に延びたる事をきき部員一同大いに元気付き愈々専只力を南下に傾注し尽す事を得ることとなり部としては反って幸いとなる（中略）一同道場に集合して今後の策を議し其の結果明日より部員全部一ヶ所に合宿することとなり直に手分けして合宿所探しに行き明午後三時全部員を道場に集め其の決定報告し明日中に全部合宿することに決定す（中略）我々は学校内の紛糾事件の為に練習は大いに邪魔された然し愈々試験は延びた吾々は明日を期して合宿するそして今までの不足の練習を補うと共に今一步頑張って金城湯池の陣を築き今年の関が原（関が原）の勝負に於て完全に覇権を彼奴より奪（奪）取せん」（S3.6.17）

c. 六高との共属・ライバル意識

他校との交流の視点から『南下軍』を見たときに最も注目すべき出来事は昭和 3 年 1 月 15 日に六高生が時習寮を訪ねてきたときのことであろう。

「六高寮委員三名時習寮へ見学に来る三名の中淵上克己君は六高柔道部の中堅 我等の好敵である在寮柔道部員一同は歓迎コンパに出席した会談中柔道に関係したことが沢山出た六高柔道部内では松山如何に盛となるも最後の敵は四高であり彼等が上洛の目標は何時も四高であるとのことである三年前四高がどん底になった時六高選手は我事のように悲しんだとの事であるこれに反して今吾等が生活は果て彼等が期待を裏切らないであらうか自重しなければならぬ必ず破らねばならぬ我等が今彼等を破る能はざれば両校の長い立派な柔道の歴史も遂に花を結

ばぬであろう」（S3.1.15）

当時四高にとって六高とは倒さなければならぬ宿敵である。六高寮委員が時習寮にまで見学に来るということから、両校は交流が深く四高、六高柔道部同士も相手校を尊重し切磋琢磨していた様子が「四高がどん底になった時六高選手は我事のように悲しんだ」という一文からうかがえる。また、富田⁵⁾によれば、東京の四高柔道部 OB に会いに行った際に六高柔道部の先輩とも共に食事をとったという話がある。旧制高等学校には柔道部という枠を超えた共属・ライバル意識に基づいたつながりがあったことが分かる。

d. 娯楽活動・コンパ

四高柔道部は生徒の自主的運営に任せられ、厳しい練習が繰り返されていたが、同時に娯楽活動やコンパもしばしば行われている。「部員一同の気分融合を目的とし練習の後、犀川大橋を桜橋方面に散策」（S3.9.10）、「新入生歓迎、部員の休息の意味をもって別所に教員も一緒にたけのこめしを食べに行く」（S3.4.28）などである。またコンパは「堅町天狗」において定期コンパが年に 2 回、その他歓迎会や送別会が数回行われている。当時のコンパについて井上は「コンパの酒は一年に二回くらいあったかな。あの頃は天狗でコンパやるからまぐさ持って来いといわれて行って肉を食べましてね。そのときは必ず吐いていたものです。」¹²⁾と語っている。

まとめと考察

昭和 2、3 年の『南下軍』からは次の点を読み取ることができる。

1. 目標は高専大会の優勝であり、学校当局や卒業生からの熱烈な激励や叱咤が加えられている。
2. 部の練習は大会に規定されており、そのため大会に出場しない非選手部員の欠席は多い。また試合期ではない 1 月から 3 月の間は欠席者や見学者が多く活動は停滞している。また脱落

者もみられる。

3. 師範はいるが、部の運営は部員主体である。部律が「自分より弱者に挑戦すべからず」「挑戦された者は拒絶することを得ず」「練習の相手は仇討と見よ押しめ業にて容易に参るべからず」など細かく決められ、上級生の「取締」を中心その規律維持にあたっている。

4. 四高全体が盟休で混乱した際も、柔道部は中立を宣言、南下の目標を再確認することによって部内の動揺を防いでいる。

5. 練習は通常は授業終了後午後3時から約2時間、夏・冬・春の休暇時には午前・午後、各3時間に及ぶ合宿練習を行っている。極めて実戦的で、かつ苛酷である。寝技を多用する「ゴシゴシ」などの練習のほか、ひとりが時に2時間を超す「五人掛」「飛行機」といった厳しい練習を課していた。こうした長時間耐久練習は高専大会の試合方式に由来するものと考えられる。

6. 中学生対象の大会を主催したり、有望な選手を各地にスカウトに行くなど部員の勧誘に力が入れられていた。

7. 試験前に練習時間を減らすなど学業にも配慮した活動がなされているが、それは必ずしも充分とはいえない。

8. 疲労やけが人がみられる場合には、練習量の軽減が行われたり、年に数度レクリエーション活動、定期コンパを取り入れ、部員の英気を養い結束を高めようとする工夫が見られる。

なお、昭和2年、3年とも高専大会は途中で敗退した。「七月十八日 之日不可忘 四高惨敗 吾に忘れ不可る歴史を残しぬ。嗚呼、吾軍優勝の夢遂に又成らず。七年間の臥薪嘗胆の後に於ける之の結果の余りにも惨めなる哉」(S3.7.18)と練習日誌には綴られている。

このように昭和2、3年の『南下軍』からは、高専大会の優勝に目標を置き、有望選手獲得に努力し、日々厳しい練習を重ね、それに耐えるものだけが初めて評価を受ける四高柔道部の様子が描かれている。普段から選手中心の試合

形式の猛練習を繰り返すことによって、けが人が多かったり、脱落していく者をそのままにしておくことは今日の価値観で言えば健全な部活動の運営とは言えないだろう。また盟休事件で学校が動揺している時も彼らはひたすら柔道をやりつづけた。こうした方針は3年生が約5時間もの話し合いの末に達した自覚的なものであった。

「私たちが柔道をやったのは、柔道が強くなりたいためでも、有名な選手になりたいためでもなかった。全く各自が自己に課した一つの青春の過ごし方であって、きびしく自分で自分を律した一時期であったのである。その後体験した軍隊生活よりももっと辛かったが、しかし、軍隊生活と違うところは、一方が全く権力に強いられているのに対し、他は自分が自分を律していることであった。その点、私たちは道場という一つの修道院にはいったようなものであった。」井上靖はのちにこのように回顧している。³⁾

昭和初期、四高柔道部の練習は、高専大会の敗退によっていっそう修道院的に自己目的化され、また苛酷の度合いを強めていったように思える。

主な引用・参考文献

- 1) 戸松信康「四高柔道部概史」、四高同窓会(1967)、四高八十年、268-306頁
- 2) このことについては、とくに三浦一哉(2003)、四高柔道部日誌『南下軍』の研究、金沢大学教育学部平成14年度卒業論文を参考にした。
- 3) 井上靖「青春を賭ける一つの情熱」、石川近代文学全集七、512-515頁、能登印刷出版、2001
- 4) 北野与一(1989)、「旧制高等学校運動部の下級中学校運動部に及ぼした影響に関する研究：第四高等学校の場合について」北陸体育学会紀要25、31-40頁
- 5) 富田保次郎、大正から昭和へ苦難の柔道部、四高同窓会(1967)、四高八十年、154頁
- 6) 徳田喜平(1977)、固め技の成立過程に関する考察：四高柔道「南下戦記」の資料に沿って、金沢大学教育学部紀要教育科学編第26号、39-51頁

- 7) 徳田喜平、宮元智（1985）、柔道固技の発達とその技術構造に関する考察：四高を中心にした高専柔道から、金沢大学教育学部紀要教育科学編第 34 号、207-220 頁
- 8) 上田正行（1987）『北の海』四高時代から見る、特集井上靖の世界、国文学解釈と鑑賞昭和 62 年 12 月号、122 頁
- 9) 資料四高学生運動史刊行会（1981）、資料第四高等学校学生運動史、総合図書、6-36 頁
- 10) 作道好男・江藤武人（1972）、北の都に秋たけて一第四高等学校史Ⅱ、財界評論新社、111-114 頁
- 11) 加賀秀雄（1982）、1930 年前後の旧制高等学校における運動部改革運動について、岸野雄三教授退官記念論集体育史の探究、331-351 頁
- 12) 井上外 7 名「四高座談会Ⅳ」、四高同窓会（1967）、四高八十年、161 頁